「観峰館紀要」第一九号の発刊によせて

本年一〇月一日、観峰館は開館三〇周年を迎えます。平成七年の開館以降、当館は多彩なコレクションを活用し、多くの企画展・イベントを開催してまいりました。さらに平成二七年、二〇周年の新館開館以後は、国指定文化財を交え、展覧会の内容をより豊かなものにしてまいりました。来たる一〇月に開催する開館三〇周年特別企画展は、その集大成として、職員一同、一意専心準備をすすめてまいります。

さて本号では、前々号、前号に引き続き、朝鮮半島にある稀少な碑文の拓本約六〇種について、田中俊明氏の論考を掲載しました。新羅時代の拓本について、最新の研究成果・知見を織り込んだ内容となっています。

また、近代の書家・日下部鳴鶴が用いたことで知られる「回腕法」について、その淵源を辿り、日本へと伝来した経緯について、松宮貴之氏の論考を載せています。

そして当館学芸員による論考は、犬養毅旧蔵の「紀泰山銘」拓本の伝来を探るほか、恒例の当館の収蔵品目録（X）は、書の古典学習に必須となる中国・後漢時代の隷書碑を取り上げています。いずれも、観峰コレクションの特徴が色濃く出た内容となっています。

本紀要が、関係各位のご高覧に供され、少しでも斯界の一助となれば幸いに存じます。

令和七年三月一日

観峰館

館長　葛西孝章